

P-124

自閉スペクトラム症児の言語発達遅滞の特徴－保護者による自由記述アンケート調査より－

近藤万里子¹⁾、星山 麻木²⁾¹⁾帝京短期大学 こども教育学科、²⁾明星大学 教育学部 教育学科

1.問題と目的

言語発達において自閉スペクトラム症（以下ASD）児には知的障害が無くとも発話の遅れやエコラリアなどの定型発達児とは異なる発達を示すことが知られている。しかし、その詳細は療育者や医療関係者などの専門家による症例の事例報告に留まっている。ことばの遅れが見られるが専門家によるケアを受けていないASD児も存在する。本研究では専門家の視点ではなく保護者の視点からASD児の言語発達の実態を明らかにすることを試みる。これにより、療育等を受けていないASD児も含め、より多様な実態を把握することが可能になると考えた。そこで本研究では、ASD児の保護者が感じている児の言語発達の特徴を明らかにすることを目的とする。2.方法

ASD診断のある5～18歳の子どもをもつ保護者121名（うち無効回答1名）を対象者としてWEBによる自由記述式のアンケート調査を実施し、言語発達について気になることを尋ねた。アンケートには母子手帳に記載されている発達の目安表を添付し参考にしてもらった。本研究は帝京短期大学研究倫理委員会の承認（承認番号2022-1）を得た上で実施された。また、本研究はJSPS科研費22k02399の助成を受けている。3.結果 120人の保護者（男性69人、女性51人）のASD診断のある我が子（知的障害有40人、無80人）についてのアンケート結果では、40人が発話の遅れ（うち26人は知的障害無）、9人が会話困難・伝達困難（うち6人は知的障害無）、6人が問いかけに無反応（うち5人は知的障害無）、4人がエコラリア（うち3人は知的障害無）、3名が発話の遅れはあるが、文字の読み書きは早い（うち2人は知的障害無）と回答した。さらに発話の遅れに関しては知的障害の有無との関連をカイ二乗検定で統計分析を行った。結果、 $2 \times 2^+(1, N = 120) = 0.171, p > .05$ となり、知的障害の有無と発話の遅れの有無の間に関連があるとは言えないことが分かった。4.考察

120名中40名（33.3%）に発話の遅れが見られたが、そのうち26人（65%）は知的障害は有しておらずまた有意な関連は認められなかったことから、ASD児の発話が遅れる理由として、知的障害ではなくASDの特徴が関係している可能性が考えられる。今後はASDに特徴的な発達の観点から検討していきたい。

P-125

発達障害児をもつ養育者の家族機能が養育レジリエンスに及ぼす影響

田中 幸恵¹⁾、郷間 英世²⁾、二重佐知子^{3,4)}¹⁾姫路大学大学院 看護学研究科 修士課程、²⁾姫路大学看護学研究科、³⁾姫路大学健康・教育実践センター、⁴⁾社会福祉法人願成寺保育園

【目的】発達障害児の特性は個々に異なり、養育する母親は心理的・身体的負担を抱えやすい。社会的偏見や家族の理解不足が孤立感やストレスを高める一方で、育児の肯定的側面を見出すことが安定した養育につながると指摘されている。養育レジリエンスは「困難があっても良好に適応する過程」と定義され、子どもの特性に関する知識、社会的支援の活用、肯定的な捉え方が要素となる。本研究は、家族機能が養育レジリエンスに与える影響を明らかにすることを目的とする。【方法】通所サービスを利用する4歳から12歳の発達障害児、その傾向のある子どもをもつ養育者191人を対象とした。調査項目は、対象とその児の属性、養育レジリエンス要素質問票（PREQ）、家族機能尺度（FFS）日本語版とした。データはすべて記述統計量を算出し、対象と児の属性、PREQ、FFSそれぞれの関連性を分析した。本研究は、所属機関の倫理審査委員会の承認を得て実施した。【結果】【結果】PREQの総得点は112点中 85.1 ± 12.3 点、FFSの総得点は96点中 65.3 ± 10.9 点であった。PREQとFFSの総得点には強い正の相関（ $r=0.621, p<0.01$ ）を示した。重回帰分析では、PREQの「子どもの特徴に関する知識」に「役割と責任」（ $\beta=0.028, p<0.001$ ）と「外部との関係」（ $\beta=0.221, p<0.001$ ）が影響し、「社会的支援」には「外部との関係」（ $\beta=0.413, p<0.001$ ）と「コミュニケーション」（ $\beta=0.259, p<0.001$ ）が寄与した。また、「肯定的な捉え方」は「外部との関係」（ $\beta=0.337, p<0.001$ ）や「役割と責任」（ $\beta=0.254, p<0.001$ ）と関連していた。さらに、養育協力者の有無では「社会的支援」の得点が協力者あり 32.9 ± 5.1 点、なし 30.9 ± 6.8 点（ $p<0.05$ ）、診断の有無では「子どもの特徴に関する知識」が診断あり 31.2 ± 4.6 点、なし 28.8 ± 4.6 点（ $p<0.05$ ）で有意差を示した。ASD児の知的障害の有無では、「役割と責任」が知的障害あり 11.8 ± 2.2 点、なし 11.0 ± 1.9 点（ $p<0.05$ ）であり、家族の役割分担が重要であることが示唆された。【考察】家族内で役割分担や外部支援を得られる環境が整っている家族では、養育レジリエンスが向上することが確認された。一方で、家族内の支援が不十分な場合や、知的障害を伴わないASD児のように障害が分かりにくい子どもを養育している家族では、十分な理解や支援を得られにくい状況であり、家族機能が十分に機能しない可能性が考えられた。